さ SA く KU ら RA

9月

Sept.2018

発行／ボーイスカウト世田谷第５団広報部

ビーバー隊
8月5日 池袋防災館

ビーバー隊隊長　草嶋隆行

猛暑の中、防災の日より１ヶ月早いですが、池袋の防災館に行ってきました。まずは消火体験。正しい消火器の使い方や家庭での正しい初期消火のやり方を学びます。東京の火災の原因で一番多いのは放火とのことで、実は１番大切な防火は家の周辺の整理だそうです！次は煙の中での避難。実際に屋内を再現した施設に煙を満たし、灯りのない中で避難誘導灯を目標に避難します。体を低くして避難しますが、実際にやってみると課題として与えられた東京消防庁のマスコットが何カ所に貼ってあるか探す余裕はありません。その次に地震体験。スカウトは震度５強、リーダーは震度７を体験します。震度７ともなると恐怖を感じるほどで、パニックになる気持ちも分かります。宣伝するわけではありませんが、ご家庭でも一度行かれることをお勧めします。

８月25～26日　禅体験とマザー牧場

ビーバー隊隊長　草嶋隆行

保護者の方の要望で３年ぶりに保護者同伴の泊まりプログラムとなりました。場所は前回同様、鹿野山の青少年禅研修所です。自由が丘から、東横線、日比谷線、京葉線、内房線、バスとの乗り継ぎ、最後はマザー牧場から徒歩です。
３時間半の移動でみんな疲れ気味でしたが、昼食の精進カレーライスを食べて元気復活です。昼食後は夜の営火に向けたスタンツの打ち合わせ。今回は初の試みとして保護者の方々にもスタンツをお願いしました。その後は僧堂に移動して座禅体験です。希望者は警策（肩をパーンと叩くやつです）を受けることができますが、多くのスカウトが進んで受けたのは驚きました。その後は作法に基づいた夕食と営火、肝試しです。営火では保護者会員による『私の子供の時の夢』スタンツも披露され、普段知ることのない一面を知ることができました笑。肝試しの後は最大の問題の就寝です。今回はスカウト部屋を作りましたが、案の定、９時の消灯後も全く寝る気配がありません。天堂副長による怪談で静かにはなりましたが、今度は怖がって、ママと寝たい、と言い出すスカウト達。ところがママ部屋は団結して完全寝たフリで無視の構え。リーダー部屋やパパ部屋など余裕がある部屋を選べ、と言うと、寝たふりをしていたスカウトが全員枕を持って部屋の下見に右往左往。結局、８人いたスカウト部屋には一人しか残らないという珍事となりました。
翌日はマザー牧場。猛暑の中で設置されたスプリンク

ラーや巨大水鉄砲で全員着替えが必要なほどずぶ濡れです。暑さに参っている動物を尻目に、一番元気なスカウトたちは牧草地で鬼ごっこです。一時間半ほど楽しんだ後に、ジンギスカンの昼食を食べ、帰途につきました。
　保護者の方々のご協力もあり、大きなケガや事故もなく無事に終了させることができました。ありがとうございます。

カブ隊
８月３～６日　夏季舎営@丹波山村

CS隊副長 青木由美

よく晴れた8月3日。
朝6時30分と例年より少し早めの集合で今年の夏季舎営がスタートしました。
玉川神社境内でまずはお参り、朝の式を行い、時間通りの出発。車内では恒例の自己紹介ならぬ他己紹介、隣の座席のスカウトを代わりに紹介するというアイスブレイク、プログラム説明などのオリエンテーションを行いました。
早めの出発の甲斐もあって渋滞にも巻き込まれず、無事に小河内ダムに到着。
水と緑のふれあい館で水の行方を知り、ダム展望台からダムを見学。高いところから見るダムは見応えが十分。そこで隊長からダムのわかりやすいレクチャーを受け、良い学びとなりました。
ところで、舎営の前週、台風12号の影響で丹波山村の避難勧告がニュースになったことはご存知でしょうか。舎営初日は丹波川で川遊びのプログラムがあるため、川の状態が心配でした。丹波山村に到着後、隊長、副長が川の確認に直行。やはり下見時とは大きく川の状態が変わっていました。
しかし新たな流れを発見。安全面を含めしっかりチェックをし、スカウト達は水遊びを楽しむことができました。そして泳ぐスカウト、川辺の生き物を見つけるスカウト、砂金収集に夢中になるスカウト、様々な楽しみをそれぞれが見つけていました。その後は工作。お馴染みの組看板製作ですが、今年は一味違います。様々な大きさの木の板。工具。これらを使えばあとは自由！組全員でデザインアイディアを出し合い、協力をして作成。仕上げには組の目標を貼って舎営の組看板となりました。朝早かったのでしっかり午睡をとり、夜はナイトウオーク、クイズも盛り込み面白いお散歩となりました。この日は少し早めの就寝。
4日。

この日は朝早く高尾天平山登山。途中、グリーンロードで滝に寄り道。涼しい風が吹いてきて素晴らしいスポットでした。山は険しいものではなく、比較的登りやすいものの、下りは少し遅れるスカウトも出てきました。その後はお待ちかねのローラー滑り台。途端にスカウト達は元気いっぱい！何度も何度も長い長い階段を登っては滑り、付き合う大人達はもうぐったり。過去には48回も滑った強者の女子がいるという滑り台ですが、暑い日の階段。大人にはとても辛いものでした。昼食後は温泉。ゆっくり汗を流してからキャンプ場に戻り、この日もしっかり午睡をとりました。
ゆっくり休んだ後は、くまスカウトのためのテント設営を行いました。設営はくまスカウト。他のスカウトは見学。やる気満々のくまスカウト達。ペグ打ちもロープを張るのも何もかも積極的できちんと指示にも従ってくれたおかげでスムーズな設営となりました。夜は肝試し。今年は怖くない肝試し！と行きのバスで説明したら多くのスカウトからブーイング。怖くない肝試しが物足りないスカウトは一人で歩く肝試しにしました。満足してもらえたかな？さて2日目も初日と同じくあっという間に眠りに落ちるスカウト達でした。
5日。
恒例のカンガルートーストを作って食べた後は、釣り場へ出かけ、ヤマメのつかみ取りをしました。１組はあっという間に全員が捕まえることができ、２組もそれに続きます。３、４組には必死なヤマメが約1匹おり、その石の下に隠れた1匹を見つけるのにとても苦労しました。ヤマメをじっくり焼く１時間は目の前を流れる川で水遊び。とてもよい深さと流れがある箇所で、スカウトも大人も大いに楽しむことができました。お昼ご飯は自炊。副長達が作った冷やし麺を美味しくいただきました。午後は追跡ハイク。キャンプ場周辺と丹波山村を追跡サインを見ながら進み、チェックポイントではゲームを行いました。制限時間のプレッシャーがある中、どのスカウトも知恵と知識を出し合い、一生懸命ポイントを取っていました。この日も午睡をとり、熱中症予防、体力回復につとめました。
そして営火。舎営のメインイベントでもある営火の楽しみは何と言ってもスタンツです。タイミングよく燃え上がる火の前で今年のお題、『大切なもの』をテーマにしたシナリオで各スカウトたちは自分の役をやりきっていました。どの組もびっくりするくらい見事な出来栄えで、本当に素晴らしかった。この日もスカウト達はぐっすりでした。
最終日、6日。
最終日ですから、荷物の整理やコテージの掃除からスタートです。寝袋があるものの、何もない小さなバンガローですし、DLの声がけも良かったのか、比較的スムーズに行うことができました。
最終日のプログラムは自然スケッチと写真コンテスト用撮影。どのスカウトも熱心にスケッチに取り組み、仕上がった絵はどれもなかなかなもの。定規で丁寧に線を整えるスカウトもいれば、副長を書き添える心使い（？）を見せるスカウトも。短い時間で感心するほどの出来栄えでした。切り取った景色は感謝の気持ちを込めて自宅への絵手紙となりました。写真撮影は久しぶりに復活したプログラム。スカウトがここぞ！と思う場所などをカメラにおさめます。この写真は後でリーダーコンテストに。そして本格的な写真コンテスト応募予定です。
昼食時に雨が降り、雨雲の様子が心配だったため、少

しだけ早めの出発とし、くじで決めたバスの座席で帰宅となりました。いつもは組での活動ですが、帰りは特別に違う組のスカウトと隣同士。楽しくおしゃべりをしたり、映画を見たり、すやすや寝るスカウトも。運よく世田谷の上に来るはずの雨雲も消えてしまい、最後まで無事に終了することができました。

さて今年の舎営は、少しすきま時間が多かったように思います。たいていは時間に追われることの多い舎営の活動ですが、今年はゆとりをもたせたスケジュールにしたところもありました。しかしそれと同時に時間の指示を守るスカウトが大半であったことが理由の一つにもなっていると思います。できたすきま時間はそれほど長いものではありませんが、その自由な時間にスタンツの練習をする組もあれば、楽しく遊ぶ組もありました。こうした良いことがある反面、ちょっとしたいざこざが出てくる場合もあります。大人にとっては些細なことでも小さな子供にとっては大きなことです。組できちんと解決できるか？気持ちを切り替えることができるか？いつでもこれは課題です。学校以外での、また異学年で関わる貴重な機会です。そんな機会で経験できることはどれも宝物。ホームシックになることもあるかもしれないし、楽しいことばかりではないかもしれないけれど、どのスカウトも一生懸命、たくさんたくさん頑張っていたと思います。そして。DLの組を見守る姿勢、スカウト一人ひとりと向き合い、サポートしてくれたことにはとても感謝しています。また来年の舎営も大きな糧になる活動であってほしいと思います。

1組 DL 中澤 仁

他のお子様との宿舎を共有し活動した初めての4日間。彼らなりに協力することや、ちょっとしたいざこざが起きる場面もありました。これらのことがが彼らの成長につながることを期待しております。
下名のイビキで迷惑をかけたスカウトのみんなには改めて深謝。

２組DL　石井無二

夏季舎営では、寝袋で寝たり、川に入ったり、ローラーすべり台をしたりと子ども達ののびのびと楽しむ姿が多く見られました。
魚のつかみ取りでは、ヌルヌルする～と腰の引ける子もいましたが、１回捕まえるとすぐにコツをつかみ2回目にはあっという間に捕まえていました。捕まえた魚は塩焼きにして頂きました。魚の苦手な子も自分が捕まえた魚と言うこともあり、食べることが出来ました。中には頭までペロリと完食する子もいました。
営火では、恒例のスタンツ発表。休憩時間など空いた時間に、自分たちで練習しようと声を掛け合い、何度も練習を重ねていて、本番ではしっかり大きな声で演じることが出来ていました。
デンリーダーとしては今回の夏季舎営では、自分たちでやるんだよと意識して声をかけ、あまり手を出さず見守りました。集合時間には５分前に集合する事・部屋を出るときは荷物を片付けて綺麗にする事など約束を意識しながら過ごすことで、自分たちでやらないといけないと自覚を持ち、お互い声をかけたり手伝ってあげたりと、組の中で協力して過ごすことが出来ました。
子ども達の意識の変化で今年初めてのトップを勝ちとることができ、２組は最優秀組賞を勝ち取ることが出来ました。中でも組長は組員への声かけもがんばり、組をまとめようと奮闘してくれました。組長も賞をもらう事ができ、組として自信のついた３泊４日になったと思います。

4組DL 和田 緑

初めての夏季舎営、本当に色々な企画が盛りだくさんでとても貴重な時間を過ごすことができました。

１組 くま 長井達大

今回の夏期舎営では、うさぎで初の梅原くんも協力し仲良くする事が大切である事を教えられました。みんなで基本的に「協力」を重視して、組長としてチームを引っぱり行事を行えました。ちなみに、行事は追せきハイクが楽しかったです。最ゆうしゅうになってもなれなくても、チームのきずなが深められて良かったです。

1組くま[redacted]

僕が、夏季舎営で1番楽しかったことと学んだことは1つずつあります。楽しかったことは日本一のローラ滑り台です。いろんな人とやりましたが、やっぱりカーブで止まってしまいました。学んだことは、みんなで協力することです。1人でも、ひまな人がいたら組がまとまらないので組の全員が協力してまとめていきたいと思いました。夏季舎営がカブの中で1番楽しかったです。

１組　しか [redacted]

今回のキャンプで一番楽しくておもしろかったのは、やはり肝だめしでした。色んなおどろかしかたがあって、またおもしろかったです。
あと、ヤマメもはじめてつかまえて食べたらおいしかった。次回も楽しみです。

1組 しか [redacted]

きもだめしのときのちょっとドキドキしました。
組長と一緒に出発して怖かったけど楽しかったです。
最後にゴールでみんなにおどかされてビックリしたけどまたやりたいです。

1組 うさぎ[redacted]

ぼくは初めて夏のキャンプに参加しました。一番楽しかったのはローラーすべりだいで、長くて急なので落ちるかと思いました。
魚のつかみどりははじめてやったけど、うまくつかめてよかったです。
さいごの日の朝に食べたカンガルートーストがおいしかったです。

2組 くま[redacted]

僕はカブ隊としては最後の夏季舎営だったけど、みんなで最優秀組賞と個人でがんばったで賞がもらえて良かったです。
これからも舎営での経験を生かして頑張っていきたいです。

2組 しか[redacted]

ぼくが舎営で一番楽しかったことは営火です。いろんなゲームや歌を歌いました。スタンツが成功して夏季舎営・最優秀組賞にも選ばれてうれしかったです。

2組 しか 河[redacted]

魚のつかみ取りで自分でつかんだ魚がおいしかったし、1時間焼いたら、骨まで食べれるなんて知らなかったので、良い経験だったと思います。

2組 うさぎ[redacted]

スタンツがおもしろくて、魚もおいしくて、川もつめたくて気もちよかったです。

2組 うさぎ[redacted]

きもだめしが、こわいと思っていたらこわくなかったです。ともだちとかたをくんでしゃべっていたらおどろかす声が聞こえなかったです。それで、話が面白かったので楽しかったです。

3組 くま[redacted]

カブ最後の夏季舎営でした。
舎営準備の活動に出れなかったり、高木DLが参加できなかったり、自分の中ではこんなことは初めてでした。
組長といっても全然未熟でとても学ぶことがありました。
今回の舎営を活かしてかっこいい組長になりたいです。

３組 しか[redacted]

僕は営火でやったスタンツが心に残りました。練習の時は全然できなかったけど、本番の前にみんなでかんがえて楽しいスタンツに出来たからです。冷たくてきれいな川で泳げたことも楽しかったです。来年は最優秀組賞をとれるように、がんばりたいです。

3組 うさぎ[redacted]

キャンプファイヤが楽しくて、きもだめしが怖かったです。
3組うさぎは、チームワークが良かったです。

3組 うさぎ[redacted]

営火がとても楽しかったです。特に初めてのスタンツを頑張りました。

4組 くま[redacted]

今回の舎営で、カブ隊の組長として働き、隊員達と楽しい思い出がいっぱいできて、とても良かったです。

4組 しか[redacted]

夏季舎営で一番楽しかったことは川遊びです。ぼくは一人で砂金をさがしていたけれど友だちも手伝ってくれて見つけることができました。二番目に楽しかったのは、きもだめしです。ぼくはふじ田くんといっしょに行ったのでこわくなかったです。来年も楽しみたいです。

4組 うさぎ[redacted]

ぼくは、みんなとローラー滑り台に乗れて良かったです。なぜなら、最初はボーイスカウトに友達が少なかったけれど、仲間と一緒に滑れたからです。３人組で滑ったのに、途中で僕だけはぐれてしまいました。僕はどうしようと思いました。よく考えたら、こいだら着くと思って、一生懸命にこいだら二人に追いつくことができました。
みんなと友達になれて良かったと思いました。

ボーイ隊
８月３～10日 日本ジャンボリー(17NSJ)
@石川・珠洲

BS隊 オットセイ班[redacted]
僕は班長になった丁度この年に、四年に一度の日本ジャンボリーに参加することが出来ました。
初めて長期間のキャンプをして、班長の難しさを実感しました。毎食班ごとに交代で行われる炊事・食材配給・火起こし等の当番をこなす時は、常に周りを見ながら指示を出さなければいけません。オットセイ班は他よりも人数が多いので敢えて自分はあまり動かず、班員全員が動けるよう心掛けました。昼間は班ごとで自由にジャンボリーのプログラムに参加しました。モジュールプログラムの、天秤を使ったゲームで（四班の中で）一番になれて、天秤がきれいに水平に釣り合った時に盛り上がったのが印象に残っています。そしてジャンボリー中はすごく暑かったのでかき氷が美味しかったです。
オットセイ班は最年少から上の代まで全員がジャンボリーを楽しんで活躍できていたと思います。僕は班長としてジャンボリーに参加した事で、今までの活動で積み重ねたスキルや経験全てを、ジャンボリーという最高の場で発揮して、さらに成長できました。4年後の東京でのジャンボリーがとても楽しみです。

BS隊 オットセイ班[redacted]
僕たちは、8月3日から10日まで初めてのジャンボリーに行ってきました。石川県まで行くのに12時間近くかかりました。1日目は、丸一日設営に費やしました。とにかく暑かったので、疲れました。こん日の夜の当番は、汚水・給水だったのですが、リアカーが使えないうえ、間違えて違うポリタンク汲んできてしまって、重いポリタンクを持って2往復しました。こんなこともあって、1日目は、とても早く寝てしまいました。5日には、開会式がありました。堅苦しい偉い人の言葉だけだと思っていましたが、スカウトのパフォーマンスだったり、17NSJのテーマソング・イメージソングを歌っているunbranfordが来てくれたりとても盛り上がりました。1万3000人近くが参加しているだけありました。そしてこの日には、大会のプログラムも始まりました。しかし人がいすぎてあまり参加できませんでした。この流れは大会中ずっと続くのですが、出たかった海のプログラムには参加することができました。大会中では、割と時間があったので、カードゲームなどで時間をつぶしました。また、僕たちは、プラザで長い時間を過ごしました。かき氷に関しては、10個近く買ってしまいました。ここまでは、楽しい感じのことを書いて来ましたが、不幸なこともあったわけですが、僕は、手の指を4本火傷してしまいました。かなりひどかったので次の日まではいいように手を使えませんでした。こうしてジャンボリーを過ごして来たわけですが、最後の閉会式のふってくるような花火には感動しました。とても楽しかったです。次回のジャンボリーは東京なので、ぜひ参加したいです。

BS隊 オットセイ班[redacted]
第17回日本ジャンボリーは、僕にとってとても充実したものになりました。
4日目に参加したマーキュリーでのビーチフラッグやストラックアウトなどは、体を動かすことの好きな僕にとってはとても楽しいものとなりました。また、活動外でのポリタンク運びや、配給など仲間と協力して大変なことをするのは、やりきった後の達成感がありました。最後の閉会式は「もう最後だからなんでもいいから盛り上がろうと、とにかく楽しもう」と、とにかく先輩後輩関係なく、みんなで飛びあったのが一番の思い出です。この日本ジャンボリーは、来年僕が行く、第23回世界ジャンボリーに大いに活かすことが出来ると思います。今回の経験は一生忘れられない経験になりました。

BS隊 オットセイ班[redacted]
初めて参加した日本ジャンボリーとても不安でしたがとても楽しい大会でした。開会式と閉会式も楽しかったです。
海のプログラムのビーチフラッグもとても楽しかったです。
途中 体調を崩したけど仲間に冷えピタももらって回復しました。
4年後のジャンボリーも行けたら行きたいと思っています。

BS隊 オットセイ班[redacted]
今回の日本スカウトジャンボリーでは、沢山のプログラムに行くことができましたが、特に面白いと思ったのが海のプログラムでした。海には、沢山の人がいて、場所も限られていましたが、そのなかに面白いプログラムいくつかありました。そのなかで僕たちがやったプログラムは、ストラックアウトと、ビーチフラッグスでした。ビーチフラッグスは、初めてだったので、珍しい体験が出来ました。

BS隊 オットセイ班[redacted]
ボーイスカウトをやってきた中で、一番楽しかったのはジャンボリーです。
様々なプログラムに参加したり、かき氷を食べたり、いつもの活動にはないことを体験しました。そして、たくさんの友達もできました。道を歩いていると、タッチしてきたり、小さなことでも友達ができていました。11団の人とも友達になれました。
先ぱい方から、テントの張り方や火のつけ方を教わり、難しいなと思いました。
リーダーが作ってくださったパエリアはとてもおいしかったです。でもぼくたちが作った米もすいはん器くらいに上手にできました。
開会式、閉会式、大集会が特に印象に残りました。いろいろな有名人、そして皇太子様と会えてとても感動しました。
次回の4年後は「東京」です。そこでまた新しい冒険をしたいです！

BS隊 カモメ班[redacted]
カモメ班は、いろいろと迷惑をかけてしまうことがありました。ぼくが班長の経験が浅く、指示を出すのが苦手なため、カモメ班に少しばらつきができてしまったんだと思います。ですが、カモメ班はたのしめるときは思いっきり楽しめている班だと自分は思います。なので、うまくいかないときもいやなことをやるときも、たのしむ気持ちを忘れずに、どんなときでも全力を出せる班になっていきたいです。
今回のジャンボリーでいちばん盛り上がったことは、閉会式でした。東北アイドルが出てきたあたりから、みんなの雰囲気がガラッと変わり、さっきまで静かだったひとが急にジャンプして踊りだしたりと、素を出して楽しんでいたのがジャンボリーを通してすごく印象的でした。いますこし悔やまれることは、もう少しジャンボリーで友達をつくっておけばよかったな、と思っています。

BS隊 カモメ班[redacted]
今年の夏キャンプはジャンボリーでした。そのおかげでいつもよりは期間が長いですが、シャワーや温泉に入ることもできました。また売店もあったので楽しく過ごせました。暑さに関しては、初日と2日目がとても暑かったです。しかしその後の日は、めちゃくちゃ暑いということでもありませんでした。また、開会式やジャンボリー大集会、閉会式ではおおいに盛り上がりました。特に閉会式では、花火が上がったりと盛りだくさんでした。次回のジャンボリーの開催場所が東京と発表された時には東京連盟約1000人がものすごい声を上げていました。個人的にも、このジャンボリーは楽しかったです。

BS隊 カモメ班[redacted]
17th日本スカウトジャンボリーが終わった。
僕自身ジャンボリーというのを聞いたことも、行ったこともなく、完全に未知の世界だった。そのジャンボリーには、驚きがいくつもあった。まず驚いたのは、その開催期間だ。今までのキャンプと言えば2泊3日が普通だったが、今回はなんと1週間！今までとは規模が違うとその時実感した。
次に驚いたのは会場内の雰囲気だ。全国から13000人近くも集まっているだけあって、とても騒がしかった。しかし、道端で「フリーハグ」と書いてある段ボールを首から提げ、通りすがりのスカウトにハグしてもらう人や、通りすがりのスカウトに次々とハイタッチをしていく人など、面白い人も多かった。
次に驚いたのは、開会式や閉会式の盛り上がりだろうか。アイドルユニットや歌手を招いて、歌って躍り狂っていた。
さらに驚いたのは、宇宙飛行士の野口聡一さんや、皇太子殿下が大集会にいらっしゃったことだ。誰もが知っているような凄い人と会えたのは、とても貴重な経験となった。
この1週間は、学ぶことが多く大変だったが、とても充実した1週間だったと思う。
4年後の2022年の開催地は東京だ。それに100周年も重なるので、今回以上に賑やかになることだろう。その頃僕は、続けていればローバー隊だ。しかし、辞めていようと辞めていなかろうと、絶対に見に行きたいと思う。

BS隊 カモメ班[redacted]
ぼくが「ジャンボリー」という一大行事に参加したのは今回が初めてでした。また6泊7日という非常に長い間、能登半島の先端という非常に遠い場所でテント生活を送ったのもこれが初めてでした。ジャンボリーは自分の想像をはるかにこえて楽しかったです。毎日毎日楽しいことばかりで、1日が過ぎていくのも非常に短く感じられました。 ボーイスカウト生活最高の思い出が作れて本当によかったです。そして閉会式で発表された次のジャンボリーの開さい地は何と東京でした。こんなに近い所でジャンボリーが行われることなんて、もう二度とないかもしれません。だからぼくは四年後のジャンボリーもVSまでは続けて、絶対に参加したいです。

BS隊 カモメ班[redacted]
ジャンボリーにはモジュールプログラムというものがある。それは、大会ごとにあるテーマに沿ったプログラムのことだ。それには、自分の興味があるプログラムがあったので、とても楽しみにしていた。しかし、情報不足や、準備不足などでモジュールプログラムに１回も行くことができなかった。これを教訓に、今後のスカウト活動は、計画性を持って行動したい。しかし、残念なことばかりではない。開会式、閉会式、ジャンボリー大集会で披露されたパフォーマンスではとても盛り上がった。また、５団で唯一僕たちの班はエキスカーションプログラムに行くことができた。そこでは、洞窟での年度の切り出しや、七輪作りの見学・体験、豆腐作りを行った。他の班が体験できなかったことを体験することができ、ジャンボリーに行った効あったと思った。

BS隊 トナカイ班[redacted]
今回の日本ジャンボリーは7泊8日と長い期間でのキャンプ活動で、始めは1週間の長さに不安もあったが終わってみると意外とあっという間だった。自分がこの日本ジャンボリーで一番つらく感じたことは暑さだ。
1週間を通じて常に暑く、夜テントで寝る際も若干暑さを感じた程だ。また気温が大幅に上昇して活動が中止になったときは驚いた。また開催中に行われたモジュールプログラムは予約待ちや待ち時間がとても長く思っているほど出来なかった。
一番楽しかったことは、開会式、大集会、閉会式だった。1万3千人程のスカウトがアリーナに集まってとても盛り上がる事が出来た。今回のジャンボリーで自分はさまざまな経験をし、学んだ事がたくさんあったと思う。
今回のように長期間のキャンプはなかなか体験出来ない事なので参加出来てよかったと心から思う。

BS隊 トナカイ班[redacted]
僕はこの日本ジャンボリーを通してロープ結びやテントの建て方、炊事より大切なものを学びました。それは友情関係です。
僕は部活などであまり班員と深く接していませんでした。
しかし、今回の日本ジャンボリーで次長として、班員をまとめることができたと思います。
そしてインド人への対応も班で協力もしました。今回のジャンボリーではスカウトの掟である友情に熱いを班だけでなく、海外も他県でも行えたと思います。来年は立派な班長になれるよう努力します。そして、来年に参加する世界ジャンボリーに向けて世界中の異文化、友情に触れ戻ってきたいと思います。

BS隊 トナカイ班[redacted]
僕は今回、初めて日本ジャンボリーに参加しました。
開催された石川県珠洲市は空気が澄んでいてとても快適でした。
僕が一番心に残っているのは閉会式です。
何故なら大会の締めくくりとなる閉会式で、僕達東京20隊を含む、約13000 人が一丸となって盛り上がることが出来たからです。
また、開会式や大集会で話されたスカウト連盟の偉い方々のお話を聞いて、スカウトがどうあるべきかを再確認する良い機会になりました。そして、最も感動したことは東京では見ることが出来ない満天の星空です。沢山の星座や天の川、流れ星が鮮やかに天に広がっいて、言葉を失い、目を見張りました。この長い一週間で沢山の事を学ぶことができ、スカウトとして成長することが出来たように思います。今回の17NSJは一生の思い出になりました。それも、花俣団委員長を始め、リーダーの方々のお陰です。
誠に有り難うございました。

BS隊 トナカイ班[redacted]
僕は今回のジャンボリーで、いろいろな体験をすることができました。
一つ目は、初めての外国人との交流です。僕は英語を習っていますが、インド人が話していてわかったのは、ほんの2,3割でした。なので自分の英語力がわかり、もっと努力をしようと思いました。また、インド人は、水筒の中身がなくなると地面に座り込んだり、係の人がダメだと言ってるのにアリーナに上らせてくれなどと図々しかったので、文化の違いがよくわかりました。
二つ目は、長いキャンプ生活の上での知恵です。今回は日本全国からスカウトが集まり、いつものように世田谷5団としてではなく、東京20隊として活動しました。そうすると、ご飯を作るのも大変で、いつも作る量より6倍、7倍のものを作らないといけなく、作業にとても時間がかかり、分担してやらないといけなかったのでいつもより大変でした。でも、今回はたくさんの先輩たちも参加していて、協力しながらやれたので、よかったです。
ここまで、大変だったことばかり書きましたが、実際には、このジャンボリーでは、普段東京では味わえない体験をたくさんすることができ、とても楽しかったです。例えば、ジャンボリー開会式、大集会、閉会式は、1万3千人が一つの会場に集まり、誓いと掟を唱和したり、野口さんや皇太子様の話を聞いたりと、色々なプログラムが行われて、特に皇太子様は人生です初めて生で見たのでびっくりしました。また、地元の中高校の演奏や地域の出し物、UNBRANFORDさんのライブ、などとても楽しかったです。あと、僕が一番盛り上がったのは、閉会式の花火です。夜空の視界を埋め尽くすほどの大きさの花火を見て、長いようで短かったなと思い、少しさみしくなりました。 他に僕が興奮したのは夜空の星です。天の川や、夏の大三角、それに東京では見えない星や、流れ星も見ることができ、とても感動しました。この一週間の長いキャンプで家のありがたみが増し、水道が使えるとか、お風呂に入れるとか、普段当たり前の色々なことの素晴らしさを改めて感じました。

BS隊 トナカイ班[redacted]
とても楽しい1週間を過ごしましたが終わってみれば短かった。外国人のスカウトと会えてうれしかった。４年後も参加してみたいと思いました。みなさんありがとうございました。

＊カブスカウト 1組デンリーダー 中澤
日本ジャンボリーは、長男が約8年前にビーバーより始めたスカウト運動における最大イベント。一方、今年になって5才違いの次男のカブスカウト入隊と共に始めた新米デンリーダーの立場にも拘わらず、欠員による途中参加という貴重な機会を頂いた事に先ずは感謝申し上げます。

カブのデンリーダーの役割は現場に寄り添いながら組長のリーダーシップを育み、楽しい組の雰囲気を作る事と理解しています。一方、ジャンボリーでは班長のリーダーシップを尊重し、ベンチャー及びローバーによるサポートを見守るというカブとは視点の異なる立場を経験しました。

グリーンバー会議でもスカウトへの指摘があったように、国内最大イベントゆえに数多くのプログラムがある中、班毎に各々が計画を立てても、実際には思い通りにならない事も多々あったかと思います。が、その時の変化に対して、みんなで力を合わせてどのように対応して行くのかを話し合い、学ぶきっかけとなった事を期待してます。正解はありません。が、事前に計画を立てて、次の手を準備して置く事が出来るようになる事を願ってます。

組織としての活動ゆえに、きまりがあります。従い、当方も時に細かい点に目がいき、注意した事もあったかと思います。が、細かい点にあまり捉われ過ぎず、スカウトの本質とは何かを自ら考える様に意識させる事の大切さも改めて学ぶ機会となりました。

本経験を2022年に東京開催予定の日本ジャンボリーに向けた活動に活かしていきたいと思います。

最後になりますが、改めて、ここに至るまでにご準備頂いた皆様に感謝申し上げますと共に、子供達が健やかにたくましく成長する事を祈念しております。

ベンチャー隊

VS隊[redacted]

今回のジャンボリーでは日本中からスカウトが集まるということでかなり緊張していましたが、みんな気さくに接してくれたので思った以上に全力で楽しめました。プログラムでは海プロや洞窟に入るなど普段あまりできない自然に触れ合えるプログラムばかりだったので、いつもとは一味違う体験ができました。普段とは違うプログラムな分、仲間との協力は普段以上に大切な事だと学びました。しかし一週間、決して楽しい事ばかりではなく、班内での衝突や早朝の配給など辛い事も沢山ありました。ですが、仲間と話し合って一つ一つ解決して行けました。
そして、なんと4年後には東京でジャンボリーが開催されるということなので、東京の良さをたくさん伝えられるように、しっかりと準備したいと思います。

VS隊 [redacted]

今回自分にとって初めてのジャンボリーであり、ベンチャーにあがって以来の長期キャンプでもありました。ボーイを支援する立場でありながら、ベンチャーはその身はスカウトという複雑な環境下にあるなかで、自分は脚を負傷し戦力外となってしまいました。そのため他のベンチャーには大きな迷惑をおかけし、初めてのジャンボリーとしてはとて悔しい思いを残す結果となってしまいました。負傷した自分を支えてくれたリーダーや他ベンチャーに感謝するのとともに、次回東京ジャンボリーにてリーダー側としてしっかりとサポートすることを胸に技術を磨いていきたいです。

17th NIPPON SCOUT JAMBOREE
平成３０（２０１８）年8月4日～１０日
石川・珠洲 りふれっしゅ村鉢ヶ崎

VS隊[redacted]

前回は制度が違って参加できなかったジャンボリー。VSになってようやく参加することができた。BSの隊付として参加したものの、はじめての僕が牽引できるか心配だった。何しろ、1週間もの間のキャンプ生活はどんな過酷なものになるのか想像がつかなかった。しかし行ってみたらそれほどでもなかった。シャワーは思っていたより何回も入ることができたし、レジャー感覚でプログラムに参加することができた。しかし、BSは何をしたらいいかわからなくなると何もしなくなってしまうことが多く見受けられた。本来ならVSの僕らが仕事を与えるべきだが、それが出来たならBSは暇を持て余すことなどなかっただろう。隊付としての実力不足を痛感した。それでも最優秀班を貰えたのはとても光栄である。
次回の開催地は東京に決まった。能登とは全く世界が違う。恐らく全く新しいジャンボリーとなるのではないだろうか。都市型プログラムに期待がかかる。次回はプログラムを楽しむ立場には立てないが、スカウトとして参加できる最後のジャンボリーでもある。なにか特別な思い出となることを願う。

ローバー隊

「ジャンボリーが押してくれた「やる気スイッチ」」
ローバー隊 清水虎之介

7月31日。スカウトたちよりも一足早く，私の初めてのジャンボリーは始まった。配属は売店部。去年のキャンポリー同様に裏方としての参加である。

売店部の仕事内容は簡単にいうと次の通りである。まずは店舗の設営・品出し・陳列といった準備作業から始まり，ジャンボリー期間中は店員として記念品を売り続け，ジャンボリーが終わると店舗を跡形もなく片付けた。割とハードな仕事だったが，かといってすべての時間を仕事に費やしたわけではない。シフト外や営業時間外は基本フリーだった。開会式も大集会も閉会式も，売店部の仲間と会場の外から見たのは大いに盛り上がった。それ以外にも夜の海で花火をやったりして，忙しさも楽しさも味わう非常に印象に残るジャンボリーだった。

ただジャンボリーが始まるまでは，正直に言って行くのが少し憂鬱だった。早く終わらないかと思ったりもした。なぜなら，裏方としてただひたすら仕事をこなすだけの過酷な2週間だとしか思っていなかったからだ。

しかし今は違う。2週間でも短すぎたとさえ思う。それだけジャンボリーは充実していた。

売店部での仕事やイベントを通じてさまざまな他団のローバースカウトと交流できたことが，最も嬉しかった。

東京の他地区だけでなく，北海道・千葉・愛知・大阪など，初めて全国にボーイスカウトのつながりができたのだ。今まで自分の活動してきた場はどれだけ狭く小さいものだったかを，身をもって実感した。

これまでの5団のローバー隊は他団との交流に積極的でなく，このような交流はできなかった。これを機に，これからのローバースカウトとしての活動では，自団で小さく活動するだけでなく，視野を広くもって規模の大きな活動やキャンプに飛び込んで，積極的にもっと多くの仲間をつくっていこうと決意した。

その最初の一歩として，私は10月に行われるアメリカキャンプに参加する。今までの自分であればあまり興味を持つこともなく，参加の検討すらほとんどすることなく終わっていただろう。しかし全国に仲間が増えていく喜びや重要性を知った今，何の抵抗もなくキャンプに参加したいと思えたのである。

今回のジャンボリーを通して自分の中で大きく変わったのは以上の点である。それは「仲間内で楽しむ」ことから「積極的に自分の知らない世界に出ていく」という意識の変化である。この「積極性」を忘れることなく，これからも新たな世界へ飛び込んでいきたい。そして世田谷第5団のローバー隊を，もっとグローバルにしたいと思う。

もう1つ，売店部の仕事に大きなやりがいを感じられたことも，今回のジャンボリーの充実につながっている。

特にそれを感じたのは，売店部の営業最終日。ほとんどのスカウトが，売店で買ったであろうネッチリングやハットなどの記念グッズを身につけているではないか。そしてみんなが満面の笑顔で歩いているのだ。その光景を目にしたとき，スカウト一人ひとりの大切な思い出づくりをサポートできた，という実感が湧いた。

しかもそれが9000人分である。9000人ものスカウトの思い出の一部に関われたのである。これは参加隊のリーダーとしての参加ではできなかったことだろう。去年のキャンポリーも相当大掛かりなことをやったと勝手に思い込んでいたが，今思えば参加者は100人ほどであった。それに比べて参加スカウト9000人以上という圧倒的に規模の大きいキャンプに，少しでも力を添えることができたのである。そういった意味で，売店部の奉仕を通してジャンボリーに貢献できたことは，他の何にも代えられない，非常に貴重な体験となった。

裏からイベントを支えることで得られるこの感動を，以前ボーイ隊の神田副長は「クセになる」とおっしゃっていた。この感動を体感したのは去年のキャンポリーに続いてまだ2回目であるが，なるほど確かに，少しクセになりつつある。「楽しませることの楽しさ」に気付いてしまった。スカウトをより一層楽しませるほどに，自分たちも楽しくなる。そう思って，これからもリーダーや裏方として活動しようと思う。

ここまで，今回のジャンボリーをきっかけとした2つの決意を綴った。これらはどちらも「自分次第」だと思っている。自分が積極的に外部のキャンプなどに参加すれば，より多くの仲間がつくれる。自分がスカウトたちを楽しませる役割をこなすほどに，より大きな達成感が得られる。そのことはベンチャー隊に入る頃から，周りの人から言われてなんとなく分かった気でいた。しかし分かった気でいながら，なかなか実践しようとしてこなかった。

しかしジャンボリーが終わった今，ボーイスカウトに対する意識が変わり，今更ではあるが，それらを実践する決心がついた。自分の中の「やる気スイッチ」が押されたのである。

そしてそのやる気を保持するためにも，今後の活動では，大きな外部のイベントへの参加とリーダーとしての奉仕を，両輪で回していこうと思っている。

「ジャンボリーという名の短期集中リーダー養成合宿」
ローバー隊 山根徳仁

1週間が過ぎた今、日本ジャンボリー（17NSJ）のことを思い返す。まずは、この夏最初のビッグイベントを支えてくれたリーダーの方々に「お疲れ様でした」と言いたい。

ジャンボリー。この響きを聞いて、心踊らないスカウトはまずいないだろう。途中参加の自分だったが、初の日本ジャンボリーは一言でいうと最高だった。大集会や閉会式の様子は今でも脳裏にまざまざと浮かぶ。 1つの大きな場所に大勢が集まってキャンプやイベントをする。その高密度な空間は圧巻だったのだ。

僕らローバー隊はリーダーとして参加したので、ただ楽しみに行くというのではない。あくまでスカウトの指導やサポート、あるいは現地作業が主である。しかしジャンボリーの高密度な経験は、スカウトのみならずリーダーにとっても、大きな成長のチャンスだった。そんな今回のジャンボリーでは、2つのことを意識した。

1つは、スカウトとの接し方である。

実はボーイ隊のスカウトとローバーの距離は意外に遠い。年齢的にはほとんど大人と子供である。なので、スカウトはローバーに対して関わりづらさを感じたり、時によっては恐怖さえ覚える。自分がスカウトの時は実際そうだった。

そういう自分の経験もあったので、私はスカウトにとってなるべく近い存在でありたいと思い、彼らが接しやすいような関係を築きあげようとした。

具体的には、呼びかけるときは必ず名前を呼ぶ。偏りが無いようになるべく全員に話しかける。そして、スカウト目線＝子供目線で会話をし、「うんうん」とちゃんと話を聞いてあげることが大切だと思っている。

2つ目は、ローバースカウト内での役割分担である。

普段の活動から各々の役割分担をもっと明確にすべきだとは考えていた。ローバーの新人3人が入る前にも、大まかな役割は存在した。だが、全員で集まることがあまりなかったこともあり、各自の役割はなあなあになりがちで、新しく役割分担することも先延ばしになっていた。

ローバーなのだから、ただ単に自分達の楽しい活動をするだけではいけない。保科BS副長もおっしゃっていたが、何か目的を設定し、それに向けて自分達で細かく計画して、お互い意見交換しながらそれぞれの役割を担い活動していくことが重要なのだ。つまり、ローバー隊はまともな「組織」であらねばならない、ということである。

今回のジャンボリーでは、細かい役割分担はまだ不十分だった。これからの活動では、7人全員がそれぞれノルマ的なものを持って、1回の活動ごとになにかしら得るものがあるようにしていきたい。

ジャンボリーを通して、ローバーのボーイとの関係性や役割を改めて考えさせられた。今のボーイは、次のジャンボリーではベンチャーとして参加する子が多いと思うが、その時になったら、今度は下の子達を引っ張っていって欲しい。あるいはその時の自分の役割を果たしながら、他の団との交流を深めるなどして経験値を積んでいって欲しい。そうやって立派になった君たちを、ローバー隊は待っている。

「私は17NSJで何を売ったか」
ローバー隊 横山拓己

今夏の第17回日本スカウトジャンボリー（17NSJ）、私は売店部販売班のスタッフとして参加しました。ジャンボリー会場内にあるプラザのオフィシャルショップ（売店）が仕事場です。その場所で、私のジャンボリーはスカウトが集まる本番よりも早く始まり、本番が終わった後まで続きました。

ジャンボリー期間前には、運搬のトラックから店の倉庫への商品の荷下ろしをしつつ、売店あるいはプラザ自体の開店準備を進めました。

ジャンボリー期間中には、倉庫整理や品出しを行いつつ、来店するスカウトやリーダーに記念グッズを販売しました。つまり売店の店員です。

そしてジャンボリー期間後には、売店を中心にプラザ全体の後片付けを担当しました。

スカウト達が集まるジャンボリー本番期間は8月4日-9日の5泊6日。それに対して売店部のスタッフは、上記したような期間前後の準備および後片付けがあるため、大方8月2日-10日の日程です。長い！

…ところが私は交通手段の関係で、鷲山さん達先発スタッフの車に乗らせていただいたので、さらに長い7月31日-8月12日の日程。なんと12泊13日！ ジャンボリー本番期間の倍以上、会場である石川県珠洲市に滞在したことになります。

その珠洲市ですが、朝は肌寒い事もあるくらいに涼しく、昼間でも風さえ吹けば幾分か過ごしやすい気候でした。12泊13日という長期間、後半は曇りであったり雨が少し降ったりでしたが、第14回日本ジャンボリー（14NJ）の話で聞いていたような暑さではなかったようで、比較的天気・気候に恵まれました。

私はかつて、スカウトとして第23回世界スカウトジャンボリー（23WSJ）に参加しました。その時から、いつかはジャンボリーを支えるスタッフとして、この大イベントに関わりたいと思っていました。なので今回スタッフとして参加出来ることになり、緊張もありましたが、とても楽しみでした。

今17NSJを振り返ると、もちろん大変なことは色々ありましたが、やはりそれは楽しい思い出です。特に、売店での接客を通して多くのスカウトやリーダー達と交流できたことは、本当に貴重な経験だったと思います。

接客していて特に印象に残ったのは、たった1つの記念グッズを買うために1時間以上も並んで商品を物色する、そんな小さなスカウトたちの姿です。欲しかったものを無事買うことが出来て満足して帰るスカウトもいれば、目当ての物が売り切れていて落胆するスカウトもいました。

ある日の朝礼の中で、販売促進の業務をされていた方が言いました。

「小さい子が記念グッズを買うために炎天下の中を1時間以上も並び、そして大会ロゴの入ったネッチリング1つを買って帰る。私たちがネッチリング1つを売った事によって、その子は思い出を一緒に持って帰れるのだ」

正確には覚えていませんが、話の趣旨はだいたいこのようなことでした（違っていたら申し訳ない…汗）。

実際、ボーイ隊に上がりたてくらいの子達が炎天下の行列に耐え、レジ前で悩みながらネッチリングやキーホルダーを1つ買ってニコッと笑って帰る。そんな場面を接客中に見るたび、今回の売店スタッフとしての仕事が彼らの思い出の一助になっているのだと、本当に嬉しく思ったのでした。

もちろん、それは私の自己満足でしかないのかもしれません。しかし少なくとも私にとっては、子供だけに限らずリーダーたちが「自隊のスカウト達へのお土産にするんだ」と話す様子は、初めてのことで不慣れな接客をこなす上で、とても励みになったのです。

ついでに（？）言えば、シフトの合間に訪ねた世田谷第5団のサイトでは、ローバーの仲間たちと話せたことが、謎の寂しさ解消になりました（笑）。職場は違えども、同じ会場でジャンボリーを支えるために頑張っていることを確認できたのが嬉しかったのだと思います。

スカウトとして参加した23WSJはもちろん楽しかったですが、立場が変わって売店部のスタッフとなった今回も、とても満足感のあるジャンボリーになりました。それは、仕事にやりがいがあったことはもちろんですが、スカウトの頃からの仲間が今回の17NSJに一緒に参加していたことも大きかったのです。

今回ジャンボリーを支える側に携われた事で、自分の中に大きな喜びと感謝が生まれました。今後さらに奉仕を中心としたスカウト活動に励むために、様々な技術を習得して成長しなければならないと改めて感じます。そして、出来る事なら4年後、東京で行われる18NSJにも何らかの形で、仲間と共にまた参加しようと思いました。

科学と詩 第9回
ローバー隊隊長　渡口要

（つづき）

10. Emulsion

「科学と詩」と銘打った今回のエッセイは，次回で第1部を終えます．第1部は「理論編」とでも言うべき内容でした．そこで，ここまで展開されてきた理論を改めて整理し，2018年さくら1月号：【科学と詩 第1回】の冒頭で述べた目標に対する1つの結論を出しましょう．つまり，科学と詩の「相容れない感じ」を少しでも消し，両者の融合を目指す，あるいは「捏造する」という目標です．

10.1.「科学⇔詩」×「能動態⇔中動態」の「まざり」

理論は，2つの対立軸の上に展開されました．1つはこのエッセイのタイトルそのものである「科学⇔詩」という軸．そしてもう1つは「能動態⇔中動態（“zero sum”⇔“non zero sum”）」という軸です．

・科学⇔詩

・“π λ α ν ή τ η ς”⇔“vagabond”

・共有（みんな）⇔孤独（わたし）

・普遍（たくさんある）⇔特殊（1つだけ）

・“mind”（知性，頭脳）⇔“heart”（感情，心臓）

・“wonders”（複数形，可算名詞）⇔“beauty”（単数，不可算名詞）

・理系⇔文系

・手段⇔目的

・理論⇔実践

・推論⇔観察

・能動態（≒受動態）⇔中動態（＝受動的能動）

・意志⇔覚悟

・因果律的⇔目的論的

・微分（≒積分）⇔変分（＝積分的微分）

・微分方程式⇔変分原理

・人類の文字（表音文字，表語文字，表意文字）⇔ヘプタポッドの文字（表義文字）

・プログラミング⇔曼荼羅

・時間順序的⇔同時把握的

・事実確認的⇔行為遂行的

・論理⇔感情

・合理⇔神秘

・主体⇔繋がり

・近代市民⇔遊牧民

・“zero sum”⇔“non zero sum”

この2つの軸は，科学＝能動態（=“zero sum”），詩＝中動態（=“non zero sum”）という風に対応づけることが可能です．それは，2017年さくら10月号の廣畑君の文章や2018年さくら2月号：【3. Success】に書かれた通り，科学は手段を提供し，詩は目的を設定するからです．つまり，2018年さくら7月号：【8. Action integral & Variational Principle】で説明したように，能動態と中動態はそれぞれ，微分方程式と変分原理を通して因果律的世界観と目的論的世界観に対応するわけですが，それはそのまま手段と目的に接続されるのです．

手段と目的（因果と目的）を媒介にして，科学⇔詩は能動態⇔中動態（“zero sum”⇔“non zero sum”）と対応する．だからB-Pは，科学と詩，あるいは能動態と中動態のバランスを取るべしと言った，と解釈し得る．

このことは，時間性の問題でもあります．2018年さくら8月号：【9. Be Prepared】で述べた「具体的な場面ではもっぱら能動的であるが，根本的な世界に対する接し方は中動態的である」という言い方は，能動態→科学，中動態→詩と置き換えて「具体的な場面ではもっぱら科学的であるが，根本的な世界に対する接し方は詩的である」としてもそのまま成り立ちます．2018年さくら4月号の清水君の文章から言葉を借りれば，科学＝能動態はリアルタイムで具体的で意識的，詩＝中動態は事後的で抽象的で無意識的なのです．

ところがそれにも関わらず，私は科学⇔詩と能動態⇔中動態（“zero sum”⇔“non zero sum”）とを区別しました．2018年さくら5月号：【6. Middle voice】の最後で述べたように，少なくともSF小説『あなたの人生の物語』においては「事態はもう少し複雑」です．そしてこれは，論理的で合理的な科学にも感情とか神秘の要素があること．またその逆に，感情や神秘と親和的な詩にも論理的で合理的な面があること．これらのことを強調するために必要な複雑さなのです．

その複雑さは，科学と詩あるいは能動態と中動態の「バランスをとる」ということだけでは理解できません．科学と詩の「まざり」の中で，自らの考えや行動を決めていくこと．科学と詩を一旦分けた上で整理し，そして再び乳化（emulsification）させること（乳化とは，水と油のような本来混ざらないはずのものをあるやり方で混ぜること．パスタソースを作る際，オリーブオイルとパスタの茹で汁を混ぜ合わせるのが乳化の例です）．

『あなたの人生の物語』を，科学⇔詩，および，能動態⇔中動態（“zero sum”⇔“non zero sum”）という2つの軸で考えると，以下のような2×2=4つの分類ができます（カッコの中には，『あなたの人生の物語』におけるそれぞれの具体例を示します）．

1) 能動態的科学（微分方程式）

2) 中動態的科学（変分原理）

3) 能動態的詩（表音文字・表意文字・表語文字）

4) 中動態的詩（表義文字）

この分類が，まさに科学と詩の「まざり」の複雑さを整理する，1つの方法だったのです．

10.2. 我々がいかに「まざって」いるか

以上のように整理すると，このさくらに寄せているローバー隊の原稿において，スカウトも私も，多くのばあい科学と詩の「まざり」について書いていることに気づきます．

例えば2017年さくら8月号：【9. アインシュタインの思考実験と美意識】で紹介した通り，科学の人と思われているアインシュタインは，実際には相対性理論を作る際に，「美意識」という詩に属する能力を最大限発揮しました．それは「物理的な美」と呼ぶべきものでした．科学に詩がまざるのです．

他方，2018年さくら1月号の松谷君の文章や2018年さくら2月号の山根君の文章に書かれているのは，日本では特に詩に属すると思われがちな言語使用が，実は「インチキ臭」く「洗脳テクニック的」であること．つまり言語は，道具として科学的に使いこなすもの，という面を持っていることが示されています．その側面は，アメリカでは小学校の頃から，「国語」の授業の中で論文・レポート・エッセイの書き方を通して子供たちに叩き込まれます．読書感想文のような情緒的な文章ばかり書かせる日本の国語教育からすれば，詩に科学がまざるように見えるでしょう．

そしてこれまでにやってきたように，科学⇔詩という対立を他の言葉で言い換えれば，この「まざり」はさらに様々な原稿に見出されます．

2017年さくら4月号：【3.「みる」こと】では，以下のように述べました．

**********引用開始**********

観察（あるいは鑑賞）は知識に依ってその豊かさが変わる．ということは，観察の前にまず知識があるということになります．

しかし他方では観察に依って知識を得るということを考えると，知識は観察の後にもあるはずです．

観察と知識がぐるぐる回っているわけです．

**********引用終り**********

またこれに続く2017年さくら4月号：【4. 科学者にとっての「みる」ことと「はかる」こと】では，以下のようにも述べています．

**********引用開始**********

運動と重力についての理論を発見する過程において，ニュートンの頭の中で実際に起こっていたことは，観察と推論（と知識）が入り混じった試行錯誤であったはずです．

（…）

これはホームズの場合も同じです．事件現場にある様々な情報の中から重要なものと重要でないものとを区別するためには，観察と同時に推論を行わなければいけないはずです．つまり，観察の後に推論あるいは推理が始まるのではなく，観察する時点で推論あるいは推理もまた始まっているのです．

**********引用終り**********

これらの文章で言わんとしていることは，推論（or 知識）⇔観察の「まざり」です．このような「まざり」の中に，科学の研究や事件の推理は成立しているのです．

2017年さくら10月号の廣畑君の文章では，手段⇔目的，物質⇔精神，ホンネ⇔タテマエ，本能⇔理性，理系⇔文系といった2項対立が問題となっています．前者があまりに優勢になってしまい「まざり」が弱体化している．そのことへの異議申し立てを，文学部の役割についての考察を通して行なっていると解釈できるでしょう．

また，2018年さくら4月号の清水君の文章では，手段⇔目的，リアルタイム⇔事後的，具体⇔抽象，意識⇔無意識などの「まざり」が話題になっています．ボーイスカウトの訓練においては，この「まざり」こそが重要な意味を持っている．「なぜ山に登るのか？」という問いを，「そこに山があるから」などといった「大喜利」に逃げることなく真っ当に考えることで，その「まざり」の重要性を整理しています．

10.3. B-Pの言葉を批評的に読む

以上のように考えた上で2018年さくら2月号：【3. Success】のB-Pの言葉を見返すと，そこにも様々な「まざり」があることが分かります．

例えば，驚異と美（“wonders”と“beauty”）がまざっています．快楽と幸福（“pleasure”と“happiness”）がまざっています．頭脳と志（“brain”と“ambition”）がまざっています．これまでに示してきたように，これらは大雑把に言って，科学と詩のまざりに対応していると言って良いでしょう．

しかしB-Pの言葉の中で最も重要な「まざり」は，前半で言われている「他人を出し抜いてトップを目指すのではなく，世界を正しく認識し，他人を助けることこそが幸福につながる」ということと，後半で言われている「幸福を得るには，受動的な態度ではなく能動的な態度であらねばならない」ということの「まざり」です．前者は“non zero sum”の世界観，後者は能動態の世界観です．本エッセイの整理に従えば，“non zero sum”は中動態，“zero sum”は能動態に対応するので，B-Pは言葉の前後半で矛盾したことを言っています．

「そんな難しく考える必要は無い」という声が聞こえてきそうです．B-Pは単に「能動的・自発的に他人を助ける立派な人こそが，幸福になれるのだ」と言っているのであって，そこには何の矛盾も無い，と．

その通り，B-Pの言葉をこのように解釈することは，普通の意味での正しい読みではありません．このエッセイでも何度か述べたように，「捏造」です．しかしその捏造は無価値では無い．無価値では無いどころか，B-Pの言葉を現代に適用するためのクリエイティブな行為なのだ，というのが私の考えです．

先ほど松谷君と山根君の文章に触れてお話ししたことに絡めれば，このような「元の文章=B-Pの言葉の意味を捏造して改変する文章」は，論文のような「科学的に正しい」文書ではなく，かといって読書感想文のような「詩的で情緒的な」文章でもありません．科学的特徴と詩的特徴がまざった文章．このような文章は「批評文」と呼ばれます．2017年さくら12月号：【14. 2017年ノーベル賞についての連想ゲーム】の最後の部分で，「言葉遊びによる連想ゲーム」のことを批評と呼び，「科学的妄想による連想ゲーム」のことをSFと呼びました．そしてそこでは，以下の2項対立をまぜた読み方をしなければ，古典はクリエイティブに読めないと述べました．

・科学的思考⇔ゲーム的思考

・理系的思考⇔文系的思考

・客観⇔主観

・手段⇔価値

言うまでもなく，これらの2項対立は科学⇔詩に重なっています．

さらに付言すれば，これは哲学の本質にも関わります．2017年さくら12月号：【14. 2017年ノーベル賞についての連想ゲーム】でも紹介した哲学者の東浩紀は，その博士論文にして主著の『存在論的、郵便的ージャック・デリダについて』において，哲学を「科学と文学の間にあるもの」として定義しています．だとすれば，科学と詩の「まざり」であるという点において，批評・SF・哲学は同じなのです．

ここまでこれば，B-Pの言葉を文字通り正確に解釈することも，逆に自分流に情緒的に解釈することも，どちらも古典の読み方としてふさわしく無いことが分かっていただけると思います．その2つをまぜた読み方，すなわち批評的な読み方をしなければならないのです．

そしてこれは，2018年さくら5月号の岡田君の文章の最後に「読み込む」という言葉で表現されたやり方でもあります．該当する部分を以下に引用しておきましょう．

**********引用開始**********

そこでタモリが行なっていることは、勇み足を恐れずに言えば、「読み込む」ことである。単に街や地形を科学的・客観的に読むのではなく、その背後に歴史や人々の生活を読み込むこと。つまり、自らの主観や感情を対象に投影すること。それが「込む」という言葉の意味だ。

対象を正確に読んだその先に、読み込むという段階がある。「のめり込む」ように読むこと。ボーイスカウトの地形を読むトレーニングは、抽象的な「読む」能力につながり、最後は「読み込む」能力に至る。

**********引用終り**********

B-Pの言葉を批評的に眺めれば，あるいは読み込めば，そこに矛盾を見いだしつつその矛盾を解消するという，回りくどい解釈が可能になります．つまり，“non zero sum”と“zero sum”，あるいは，中動態と能動態の「まざり」こそが大事である．そのようにB-Pは主張していると考える．すると“Be prepared”というモットーは，単に中動態的世界観を表しているだけではなく，この「まざり」の考えを表している，ということになるのです．

（つづく）

会議報告

今月はありません。

会議予定

9月9日(日)　育成会役員会　9:30～　尾山台ロイヤルホスト
9月22日(土)　団委員会・団会議　19:00～　尾山台地区会館第1会議室

育成会より

10月20日(土)21(日)の両日、今年も尾山台ハッピーロードフェスティバルに参加いたします。例年の交通整理と並行して、5団としてブースを設け「火起こし体験」「寝袋体験」「ロープ結び体験」を催す予定です。ボーイスカウトに興味・関心をもってもらい、新たなスカウト獲得につなげたいと思っています。スカウト達にも協力してもらい、盛り上げてもらおうと考えておりますが、ぜひ保護者の皆さまにもお手伝いをお願いしたく、別途メールにてお願いさせていただいております。

12:30～17:30で交代しながらブースにつき、また17:00から交通整理も担当します。お父さま方のご参加大歓迎です。ご協力よろしくお願いいたします。

ご意見、ご質問がありましたら、いつでも連絡係までご連絡ください。